

# 教育セミナー VII (生物化学分析部門)

## 検査前プロセスと検査値への影響

### ～採血による誤差要因～

◎石井 葵<sup>1)</sup>  
積水メディカル<sup>1)</sup>

現在、検査業務の多くは自動化され、近い将来にはそのほとんどが AI に取って代わると予想されている。しかし、そのような時代が来ても、今と変わらず人の手に頼らざるを得ない業務が「採血」かもしれない。なぜなら、血管の弾性・位置・太さなどは一人ひとり違い、目で、手で確認する必要があるからである。また、採血業務においては、「採血管の取り扱い」「採血手技」などによって引き起こされる「検査値への影響」の低減は永遠の課題である。

採血管を取り巻く環境は刻々と進化している。例えば採血管は、ほんの（というには時間が経っているが）35 年ほど前の材質はガラスであったのが、今やほぼ 99%はプラスチック管へと置き換わり、高速凝固タイプ、オーバーキャップタイプなど時代のニーズに応じて進化を続けている。採血針であれば、翼状針の登場により、採血者のストレスになっていたであろう「神経損傷」を引き起こす可能性が低減された。このように、採血を取り巻く環境の進化は目まぐるしく、採血・検査に関与する立場であれば情報のアップデートは重要である。

2019 年 3 月 20 日に発行された標準採血法ガイドライン (GP4-A3) では、補遺 2 として『採血手技が血液検査の測定値に与える影響』の項が新設された。また、精度保証の概念が浸透し、検体採取や前処理の重要性が認知され、プレアナリティカルな要因による多くのピットフォールが報告されている。

本セミナーでは、採血管ならびに汎用自動分析装置用試薬を販売するメーカーとして、よくあるお問合せを含めた「採血管の取り扱い」や「検査値への影響」についてご紹介したい。この機会に、検査前プロセスにおける「採血」という業務の重要性について、再認識いただけると幸いである。